月は光を放たず

満洲敗戦記

辻　薦

月は光を放たず

満洲敗戦記

辻　薫

北洋社

著者略歴

大正6年2月生れ。昭和16年3月東京帝国大学農学部卒業。農学博士，技術士，コンサルティング・エンジニヤを業とする。現在，日本コンサルティング・エンジニヤ協会副会長。

著書　『洗浄と洗剤』『食品加工技術ハンドブック』ほか専門書多数。

現住所　東京都府中市小柳町4－5

月は光を放たず　満洲敗戦記

一九七八年六月二十日　第一刷発行

著者　辻　薦

発行者　伊藤金吾

発行所　北洋社

〒102東京都千代田区富士見二－二－一

電話　東京（二六四）〇五五一

振替口座　東京一－一三三二四三

印刷　豊国印刷株式会社

製本　株式会社　大　製

定価　九八〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

© Susumu Tsuji 1978 Printed in Japan

目

次

第一部　敗戦の前後――3
敗色　5
ソ連軍の参戦　8
敗戦　16
八月二十五日事件(前)　27
八月二十五日事件(後)　35
孤独の部隊長　53
第二部　ソ連軍の下で――61
自活の途　62
「九月十三日事件」　67
掠奪と暴行　74
満人との紛争　81
引揚問題　85
ソ連軍による産業施設の搬出　89
銀塊の隠匿　93

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

満洲チブスで入院 97
部隊長連行される 102
再び集結命令 106
怨嗟の的ソ連軍 112

第三部　中共軍の下で——115

捕虜の移管 116
中共軍 122
中共の政治工作 126
国民党地下組織と清川中隊 131
清川中隊の最期 136
どん底の日本人 141
二人の陳君 145
中共軍の退却準備 149
中共軍に同行する人たち 156
悲劇の序曲 161

最後の嘆願 165
逮捕の手 172
取調べ 176
銀塊の行方 181
火夫たち 191
中幕の暗転 201
三上の自供より 207
隠匿武器 214
守田少尉の銃殺 220
砲声迫る 223
四将校の銃殺 229
第四部　国民政府軍の下で―― 233
真空地帯 234
江口中尉の死 238
引揚げ迫る 240

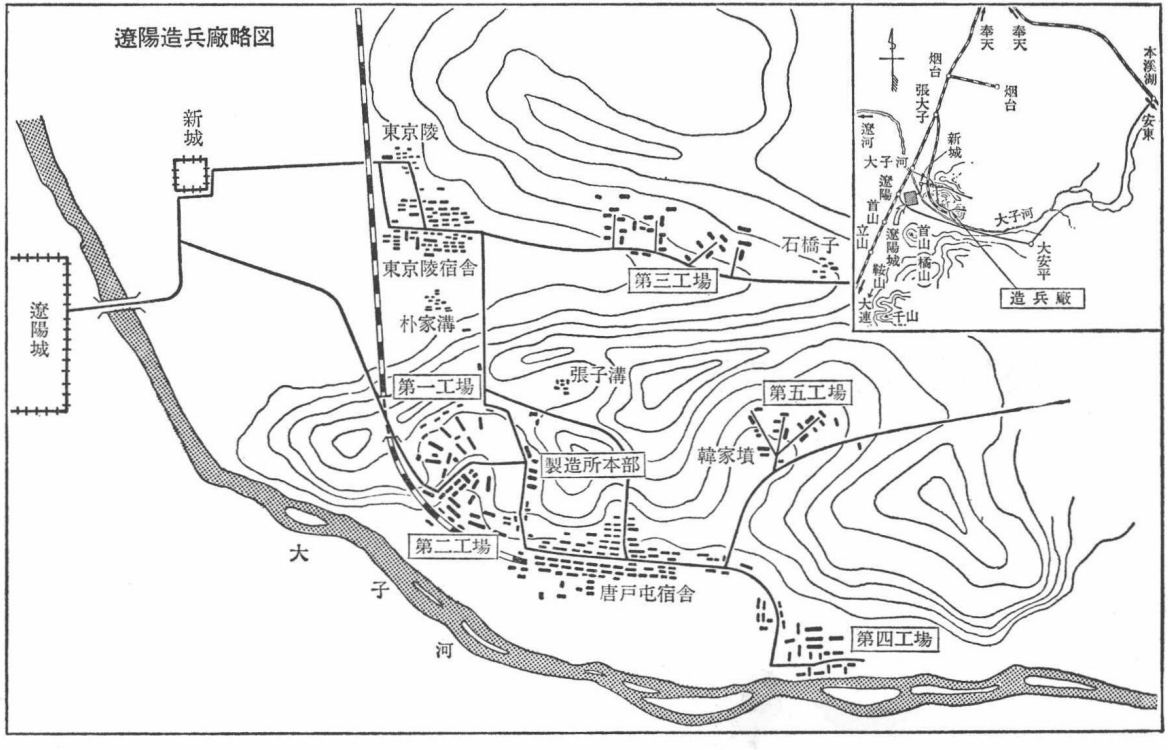
第一次遣送　245
去る者、残る者　251
国民政府の官吏たち　255
留用生活　261
満洲の四季　266
遼陽よりの脱出　272
日本への帰還　276
＊
後日談　283
付記――在満日本人の運命　285
あとがき　295

月は光を放たず

満洲敗戦記

第一部　敗戦の前後

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c


遼陽造兵廠略図
新城
遼陽城
東京陵
東京陵宿舍
朴家溝
第一工場
張子溝
第三工場
石橋子
第五工場
韓家墳
製造所本部
第二工場
唐戸屯宿舍
第四工場
大
子
河
奉天
奉天
烟台
烟台
張大子
本溪湖
安東
遼河
大子河
新城
遼陽
首山
立山
遼陽城
首山
橋山
大子河
大安平
鞍山
大連
千山
造兵廠

敗色

その日、真夏の大空は果しなく明るく輝いて、私たちの造兵廠は、夏草の生い茂った静かな自然のたたずまいのなかにあった。しかし、この広漠とした地平の彼方ですでに燃えさかっている戦火は、数日ならずしてここまで野火のように拡がってくるであろう、……私は、くちびるを噛みしめながら、ラジオのニュースに聞き入っていた。

昭和二十年八月九日の未明、国境沿いの都市ではソ連軍の飛行機の爆撃によって直接に、また大方の日本人はラジオによってソ連軍の侵入を知った。来るべきものがついにやってきたというのが、誰もの偽らぬ実感であったろう。

午前八時、作業中の者を除くすべての日本人従業員を製造所本部前の広場に集めて、部隊長東少将の訓示が行われた。要旨は、われわれ在満日本人にもいよいよ一死報国の時がきたこと、われわれが製造した火薬はこれまでは南方作戦で使用されてきたが、今度こそ直接この満洲の防衛のために役立つ、これにまさる光栄ある任務はないこと……などであった。

けれども、訓示する部隊長の顔にも、苦渋と疲労の色はかくせなかった。かつては無敵と精強を誇った関東軍の今日の弱体を知っているのは、誰よりも、戦力補給の任務を与えられている私たちであった。無敵・精強という神秘のベールに包まれていた関東軍は、数日のうちにその正体を暴露せざるをえないであろう。だが、ただ無為にして敗退するとは思えなかった。しばらく戦局を持ちこたえることさえできれば、新しい途もやがて開けてくるであろう。……私たちは、関東軍の健闘をひたすら

祈るほかなかった。

工場長である私は、自分の工場に帰ると、満人（当時の日本人は、現地満洲の住民をこうよんでいた）の従業員たちを集めた。通訳を介して戦局を説明し、あらゆる困難に対処して日満一徳一心の精神で共に闘おうではないかと説いた。満人の眼は無表情ではあったが、しかし特にいつもと変った動揺の色も見られなかったので、私はひそかに安堵した。

私たち将校は、平素の作業服を脱いで、その時から完全武装に身を固めて行動することになった。火薬をつくるにも原料不足が続いていたので、開戦になっても作業面で格別の非常体制はとりえなかったけれども、敵の諜報網や暴徒の破壊工作には備えなければならなかった。

私たちは、戦闘のその後の情報を集めることに努力した。ラジオ放送は、関東軍は善戦し、各地で敵の前進を阻んでいることを繰り返し報道していた。

私は、関東軍の火薬の生産を一手に引受けていたこの遼陽造兵廠に、技術将校として勤務していた。関東軍が抱いた雄大な大陸経略の一環として、ここには莫大な臨時軍事費が注ぎこまれ、その計画の完成のあかつきには、二千万平方メートルの敷地内に東洋一の大火薬工場が出現するはずであった。

大東亜戦争が始まって以来、私たちは一面では工場の建設を急ぎ、併行して、逐次完成した工場での各種火薬や弾丸の製造に忙殺されていた。投下爆弾、野砲弾、迫撃砲弾に使用する爆薬等が生産され、一部はこの造兵廠で、残りは補給廠に送られて弾丸に成型された。

ところが、大東亜戦争の進展につれて、建設資材は不足し、工事も難行を極めた。火薬の生産に必要な直接原料からして絶対的に不足するようになった。弾丸の製造に必要な鋼鉄すら充分になかっ

た。投下爆弾や大口径の砲弾の要求は、しだいに小口径の野砲弾や迫撃砲弾にかわり、ついには砲弾の製造さえ要求されなくなった。これは、弾丸よりも先に、これを積む飛行機や大砲がなくなっていることを意味していた。

私は、業務連絡のため、しばしば新京（長春）にある関東軍司令部の補給課に赴いた。満洲にあるいっさいの資源や産業を関東軍の戦力とするために絶大な権限を掌握して産業界に君臨していた機関であり、関東軍の装備、補給に関するあらゆる業務を担当していたところである。

在満の日本人に戦局の不利が認識されるにいたるずっと以前から、そこではすこぶる悲観的な情報が交されていた。私たちは今度の戦争を決定的に支配することになった戦略物資、とりわけ火薬や弾薬の補給に関する絶望的な資料を誰よりも早く入手できる立場にあったが、補給課で得る情報は、さらにこれを裏付けるものであった。敗戦の前年に満洲で新しく編成された師団には、大砲や車輛はもとより、個々の兵隊に持たすべき小銃や剣まで不足していた。しかも、それまで満洲にあった重装備の精鋭は、すでに南方の作戦に転進していた。その空白を新編成の師団で埋めなければならなかったのだが、それにあてられたのは、応急の召集兵からなる無装備のかかし部隊であった。

敗戦の年に入ると、兵員の数だけをととのえるために、ついに四十歳をすぎた老在郷軍人までが軒並みに召集された。これはもはや戦争には全く役立たない、幻の軍隊でしかなかった。

そんな状況のもとで、私たちにあわただしく命令されたのが、急造地雷の製造であった。

TNT火薬、硝宇薬、硝酸アンモンなどを配合して数キログラムの塊とし、これを四角な木箱に入れて起爆薬と導火薬をつけたこの爆薬は、それにふさわしくも〝骨箱〟というニックネームが付けられた。原料の火薬さえあれば、鋼鉄も何もいらないこの爆薬は、仮装敵国であるソ連の戦車に対する肉薄攻撃用の武器であり、〝たこつぼ〟と称する一人用の壕にひそんだ日本兵が至近距離に迫った敵

の戦車をこれで爆砕しようという特攻兵器であった。私たちはある時期この爆薬の製造に忙殺された。

関東軍がこのような戦法を考えだした当初、私はこの爆薬の性能試験に立会ったことがあった。この地雷を地上に置いて、その上にソ連軍の戦車のカタピラと日本軍の八七式戦車のカタピラとを置き、爆破試験を行った結果、日本の戦車のカタピラはちぎれてふっ飛んだが、ソ連軍のそれは宙を舞っだたけで形さえ変えなかったのである。この試験結果は、士気に影響を及ぼすという理由で厳秘に付された。この地雷の製造を命ぜられた時、私は以前の爆破試験の結果を思い浮べて、暗然としたものであった。

ソ連軍の参戦

昭和二十年四月、満洲の重要工業都市である奉天（瀋陽）および鞍山が、突如米国のB29爆撃機によって爆撃された。すでに太平洋海域ではサイパン島が敵の手中に陥ち、戦局は決定的に不利になっていたけれども、この満洲は戦闘の域外にあって、表面的にはまだ平静を保っていた。だが、この日を境に、満洲の広い空は敵機の支配下に入り、はるか海の彼方からの重圧がひしひしと身に迫ってくる。

米軍にもまして気掛りなのは、ソ連軍の動向であった。すでに欧州戦線の大勢は決し、ソ連軍の精鋭は、ソ満国境に向けて大挙転進を開始していた。日ソ中立条約も、ソ連によって一方的に破棄された。

関東軍の報道部は、在満日本人や満洲国民を説得し士気を鼓舞するのにおおわらわであった。——たしかにソ連軍の一部は極東方面に移動しつつあるが、シベリヤ鉄道の輸送能力から見て、充分な兵

力を国境に展開できるにはなお一年以上の期間を要すること、兵力の移動に日本軍に威圧を加えるねらいはあるとしても、戦闘を開始する意図はないと判断されること、したがって、在満日本人は迫りつつある米軍との本土決戦に対して支援態勢を準備しなければならないこと——等々。

ソ連軍との戦闘開始を予期しながらもソ連軍をことさらに刺激することをおそれていたのか、ソ連参戦の可能性がないとみていたのか、発言の真意はわからない。ともあれ、すでに関東軍は戦闘能力において全くの抜け殻であり、擬勢のかかし部隊にすぎないことを、相手の諜報網は完全に見透していた。

ソ連軍が参戦すれば、満洲に悲劇的な事態を招くことは、在満日本人の誰もが知っていた。だからこそ、ソ連軍は参戦しないだろうという情報や宣伝に、希望的な期待をつないだ。関東軍自身、自分の戦力に全く自信をもてないため、はかない希望的観測の中に溺れていたのかもしれない。

昭和二十年八月六日、広島に特殊爆弾が投下されてかなりの被害を受けたという第一報に続き、それが原子爆弾というものらしく、きわめて強力な破壊力を示したという報道が伝えられた。被害の実相は知らされなかったけれども、そのことがかえって全滅的なものであることを推測させた。

広島の市内には、私の両親と弟妹が住んでいた。今はその生存すらあやぶまれた。

数日おいて、長崎にも同様な爆弾が投下された。本土の戦局が重大な転機に立っていることは、もはや誰の目にも明らかであった。

昭和二十年八月八日の深更、ソ連政府はモスクワ駐在の佐藤大使を呼び出して、宣戦の通告を行った。同時に、ソ連軍が満洲、北朝鮮、樺太などの国境においていっせいに進撃を開始し、国境守備の日本軍との間に激しい戦闘を開始した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com